

# HUG+展2024 審査員講評

大手 裕子 氏(大阪成蹊大学芸術学部 教授)

今年も多くの方が描きたい、創りたいという熱意を持って制作されたことに、まず喜びを感じました。今、デジタルツールが多様に発達する状況により表現し発信することに可能性が広がっています。今回ご応募の作品からも創作の世界のそんな動きが少なからず影響しているように感じます。社会の様々な動きとも相俟って、表現者は“何を、どのように”と迷うこともあるかと思えます。

この展覧会に集う皆さんが表現者を中心にして“やりたいこと、心の向かっているもの”を見失わず作品として形になるよう手を繋いでいくことができるよう願っております。

岡 泰正 氏(神戸市立小磯記念美術館・神戸ゆかりの美術館 館長)

作品からメッセージを聞きもらすことのないように何度も何度も出品作を見ました。心にひっかかる感覚を秘めた作品を選びました。造形しないではいられない純粹さが伝わってきて、アートとしての完成度を示す作品を選びました。

《タロットと天使》は、タロットカードのイメージをもとにして独自のキャラクターを演出しているところに魅かれました。ずっと見ていたい気持ちにさせられます。

《ヴィーナスの誕生》は、貼り絵の連作がフレームの中にまとめられ、色彩や構図の微妙な変化に心をざわつかせる表現性が生まれています。ヴィーナスの誕生の変奏がアートです。

《夏の甲子園》は、自由な視点で球場をとらえ、選手と歓客の熱気がとらえられています。

《鯖》は、すがすがしい香気があります。

《だって楽しいんだもん！！》は、文明批評のインスタレーションとなっていて、この展覧会で異才を放っていました。

服部 正 氏(甲南大学文学部人間科学科 教授)

今年も多くの方が力作が集まり、充実した展覧会になりました。特に立体部門のレベルアップが著しかったように思います。良い作品とは何かというのはむずかしい問題で、見る人によってそれぞれですが、私自身は今までに見たことがないような、新鮮な驚きがあるものを中心に選ばせていただくようにしています。

ぜひ、人の真似ではなく、自分らしいオリジナルな作品を作ってください。美術の良いところは、自由に自分を表現できることです。人に合わせて遠慮する必要なんてまったくありません。人と同じでないほうが良いというのは、ちょっと勇気があることかもしれませんが、それこそがアートの醍醐味ですので、ぜひそれを楽しんでください。

山崎 均 氏(西脇市岡之山美術館 副館長兼主任キュレーター)

今回は、とても自由な発想で作品を制作されているのが伝わってきた。様々な技法を試し、即興的に自らの世界から飛び出してさらに未知の世界の扉を開こうとする作者の息使いが、直にきこえてくる。コロナ以後のわたしたちの社会は、こうした個性豊かな作者の自由な発想を尊重するところから、改めて再出発を遂げつつある。今後はますます美術と親しみ、手を動かすことのおかげがえのない大切さを、できるだけ多くの人々の間で分かちあう、こうした展覧会の重要性が高まるはずである。今後の展開を楽しみにしています。